

# 野毛大道芸20年 初心忘るべからず

歴代実行委員長による座談会



(左から) 藤代さん、松本さん、福田さん

## 藤代邦男

●野毛大道芸実行委員長／居酒屋「玲」経営

## 松本 純

●野毛大道芸顧問・第9回野毛大道芸実行委員長／衆議院議員

## 福田 豊

●野毛大道芸プロデューサー・第8回野毛大道芸実行委員長／中華料理「萬里」経営



福田 ●今年でスタートから20年、30回目の節目を迎えた野毛大道芸ですが、今年は「第10回NHK地域放送文化賞」までいただき全国に知られるようになりました。しかし始めた当時は、何もわからずとにかく右往左往の私たちでした(笑)。今日は野毛大道芸の歴代実行委員長にお集まりいただき、小さなまちが手探りで始めたこのイベントの原点の頃のお話などをお聞かせいただければと思います。

### まちに賑わいを取り戻したい

藤代 ●「野毛大道芸」を始めたのは、とにかく野毛に賑わいを取り戻したいという一心からでした。野毛という町はね、私が小学生だった頃(昭和20年代から30年代)は大変賑やかなところでした。当時は桜木町駅の近くに職業安定所があって、毎日のようにたくさんの方がこの町に流れ、大晦日には通りに露店が並び、買い物客でごったがえしていたものです。

福田 ●終戦直後、野毛には闇市がありましたから、昭和30年代のはじめまで連日、押すな押すなの人でごった返していましたね。その人出も次第に途絶え、昭和40、50年代には通りは寂しくなりました。

松本 ●あの頃の危機感は深刻でした。

### 神輿の復活が「再生」への拍車に

藤代 ●野毛から賑わいが消えた原因のひとつに、町が一体感を失いバラバラになったことがありま

した。当時、各町内会長や飲食関係の組合長など長老で構成されていた町の組織は、連合青年会などの若い衆と大きな距離感があったんです。まちの繁栄のためには、まず長老たちと若い衆が一緒になって力を合わせなければと、私は思いました。

福田 ●町の長老たちと若い衆をつまくつないでくれたのが、当時青年会の代表だった藤代さんでしたね。

藤代 ●若い衆が、町のために本気になって取り組もうというきっかけになったのは、町内の神輿を復活させたいという気持ちからでした。町がさびれてゆくに連れ、盛んだった祭りもすたれ、町内の神輿のこともみんな忘れていったんです。若い衆はほかの町へ出かけ、人の町の神輿を担ぐようになったんです。それじゃ寂しい、なんとか自分の町内の神輿を担ごうという方向へ気持ちが高まっていったんです。

福田 ●小さな町の決め事は、理屈や主張がいくら正しくても簡単に通るものではないんです。みんな子どもの頃から同じ町で暮らしてきた者同士です。まず発言するその人間を見る。町の長老から厚い信頼があり、若い衆からも慕われていた藤代さんだから、各町内会や青年会をひとつにまとめられ、野毛の町に祭りや神輿が見事に復活したんです。このことで町に一体感が甦り、町を再生していこうというエネルギーに拍車がかかりました。

「野毛街づくり会」の発足と「大道芸」のアイデア

松本 ● 神輿復活の動きと平行して、町の商店主たちは、どうしたら町に昔のような活気や賑わいが取り戻せるか毎晩議論を重ねていました。「野毛街づくり会」という会を立ち上げ、私は当時30歳代後半の若造でしたが事務局の仕事を引き受けました。野毛を元気にするためのアイデアを出し合っている中、福田さんが大道芸のイベントをやるうと言いだしたんです。

福田 ● なぜ「大道芸」かというところ、芸人さんへの出演料はお客さんが投げ銭という形で出してくれるから低予算でできると考えたんです。大道芸の面白さは芸人さんとお客さんの真剣勝負です。お客さんは芸が面白くなければ投げ銭を出さない、芸人さんはお客さんを惹き付けようと芸を磨く…。芸人さんのびのびと表現できる場さえ我々が用意すれば、きっと素晴らしいイベントが実現すると思いました。何と言っても野毛は金もない、経験もない、知り合いもいないの「なげなげ」でしたから（笑）。

松本 ● 今にして思えば、時代のタイミングも良かった。当時は、高度経済成長が行き着き世の中はガチガチの管理社会で、誰もがありきたりのものに飽きていました。お客さんが自分が気に入ったパフォーマンスに、自分が納得できる投げ銭を払うという大道芸イベントは、とても新鮮で、他の



芸人さんのパワーには驚きました



町では全くやっていませんでした。

藤代 ● 「投げ銭」の考え方は、野毛の闇市を彷彿とさせるものでしたね。闇市では、お客さん一人ひとりが売り手と真剣に向き合い、自分で値付けをするなどして、物々交換のように欲しい物を手に入れていたんです。

福田 ● 大道芸の投げ銭もそれと同じですね。売り手と買い手がせめぎあう面白さを野毛の魅力にできればと思いました。

将来にわたり「元氣」が必要！

松本 ● ただ問題は、大道芸自体が当時まったく知られていませんでしたから、これを町の人たちにとって納得してもらうかが大変でした。

福田 ● あの時、松本さんが町の人たちを説得してくれたんです。

松本 ● 神輿の保存で盛り上がった人たちはどちらかというと伝統的で保守的、それに対し大道芸は、歌あり、踊りあり、手品あり、もう何でもありの大変革的なイベントです。町の人たちにとっては黒船が来たようなまったく新しい価値観で町の保守層と革新層がぶつかり合いました。そんな中、私がお話させていただいたのは「野毛の将来には元氣が必要なんだ」、そのためには「他の町がやっていない新しいことにチャレンジしよう」ということでした。大道芸のイベントには人を集める可

能力があるという思いを必死になってお伝えしました。

**福田** ●大道芸を始めた一九八六年当時、「国鉄（現在JR）桜木町駅移動」の二コースがすでに発表されていたから、このままだと野毛はだめになる、何としてでも野毛に人を集めなければという町の人たちの切実な思いに、松本さんの言葉は響きました。

**藤代** ●あの時はじめて、まちの老若男女が意気投合して「まちに賑わいを取り戻そう」と一つになれたんです。

**福田** ●大道芸のアイデアを提案したのは私でしたが、藤代さんが地元の人たちの幅広い信頼を集め、若い松本さんが将来へのビジョンを示し、若者を中心にしたスタッフ運営の基礎を作ってくれました。このお二人がいなかったら野毛大道芸は実現しませんでしたね。

**松本** ●三人のうち、一人欠けても出来なかったでしょうね。

### 何よりも芸人さんのパワーのおかげ

**藤代** ●私はね、本音を言うと、大道芸といっても道ばたで楽器弾いて歌を歌うだけで人が集まるんだらうかと思っただなあ（笑）。でもね、それを一年、二年と続けると、芸人さんの芸が凄くなっていくのわかるんです。面白くないとお客さんは本当



野毛を元気にするためのチャレンジでした



に寄ってこないから、芸人さんは必死になって芸を磨くんです。そのパワーは凄いなと思いました。

**福田** ●野毛大道芸が20年間も続けてこられたのは、何よりも出演してくださっている芸人さんのおかげなんです。実行委員会も芸人さんの気持ちを第一に考えて運営してきました。野毛大道芸の歴史の中で惜しくも亡くなられた芸人さんが六人いらっしゃいます。早野凡平さん、パン猪狩さん、サイクル松林さん、北京来々さん、園部志郎さん、元次郎さん……。それぞれの芸人さんが亡くなられた年には野毛大道芸で追悼公演を行ってきました。私たちはなによりも芸人さんとお付き合いが第一だと思っています。

**松本** ●特に、早野凡平さんには大変お世話になりました。最初、われわれは芸人さんお一人一人にお願いして出演していただきましたが、凡平さんが芸人さんたちに声をかけてくださったので、全国の大道芸人さんが「野毛大道芸」のを知り、芸人さんの方から「出たい」と連絡をいただけるようになったんです。

### 広がってゆく「野毛大道芸」

**藤代** ●「野毛大道芸」が次第にマスコミなどを通じて全国的に注目を集めはじめると、静岡市の市長がノウハウを学びたいと訪ねてきましたね。市長はそれから毎年五年間にわたり野毛大道芸に通



「野毛大道芸」を大切な宝物として若い世代へと伝えていきたいですね



いつも、運営のやり方を学んで帰り、静岡市で大規模な大道芸のイベントを立ち上げました。野毛で活躍していた芸人さんがそのイベントでグランプリを獲得するなど、大道芸が全国的に市民権を得るようになって大変嬉しかったですね。

**松本** ● その頃から、国内だけでなく海外からも野毛大道芸に出演したいという芸人さんが飛躍的に増えました。

**福田** ● 芸人さんあつての野毛大道芸なんですが、会場のスペースにも開催期間にも限界がありました。「なぜオレを出さない」と芸人さんからの苦情が殺到するようになったんです。こうなったら会場を広げるしかない、野毛以外の近隣の町へお願いし、大道芸会場を広げることになりました。

**松本** ● 今では、野毛のお隣の吉田町商店街、そして伊勢佐木町、さらにJR線の桜木町駅をはさんで海側のみなとみらい21地区の全エリアへと広がり、ありがたいことに、いつのまにか横浜市を代表するイベントに成長しました。

**福田** ● 大道芸の原点は、生身の人間と人間が直にふれあい、喜びや感動を分かち合えること。それはみなとみらい21のようなハイテクの最先端の街でも、野毛のような昔ながらの古い商店街でも同じように楽しめることが証明されましたね。

**藤代** ● 大道芸を持つ人間同士の信頼感やふれあいの喜びは、街を超えて、国境を越えて、世代を超

えて、どんな人間の心にも受け入れられるんだなと思いました。

### 次の世代へ伝えていきたい

**松本** ● 私が「大道芸を続けていこう」と心に誓ったのは、スタートして三年ぐらい経った頃です。子どもたちがじっと芸人さんの芸を見ていて、見終わった瞬間、真剣だった表情から満面の笑みがこぼれたんですね、パッとあたり一面に子供たちの笑顔がはじけ町に光がさしたようでした。「これはぜひ続けていきたい！」と思いました。

**藤代** ● 野毛地区にある小学校には「大道芸クラブ」というクラブ活動ができたんです。大道芸の開催日には、父兄同伴で児童たちがそれぞれにピエロの衣装にお化粧をしてまちを練り歩くんです。それがお客さんにも大変人気があるんですよ(笑)。

**松本** ● 野毛大道芸が他の街へ広がってしまっても寂しいという人もいます。でも、大道芸の日には、野毛の町が周辺に大きく広がるので楽しくなるといふ人もいます(笑)。

**福田** ● 野毛大道芸は戦後の闇市の時代に息づいていた人と人がふれあう喜びを、今の時代に甦らせてくれました。これからもこの町の大切な宝物として若い世代へと伝えていきたいですね。今日はどうもありがとうございました。